

(2) 令和6年度の教育IRセンターからの報告

②共同化科目担当者会議

京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員／京都府立医科大学 教授
高西 陽一

2024年9月26日午後に、令和6年度共同化科目担当者会議がZoomによるオンライン会議として開催された。今回のテーマはProject Based Learning（またはProblem Based Learning,PBL）についてで、日本語では問題解決型学習、ないし課題解決型学習とよばれるものである。三大学共同化科目でもこれに関連した講義が行われているが、あらためてその基本的な特徴を学び、現況について3大学間で意見交換を行うことを目的として、三大学共同化科目を担当されている先生から基調講演を頂くとともに事例報告を学内の先生お二方にして頂いた。

京都府立大学副学長の山口先生の挨拶に続いて、まずは導入として司会もなされた京都三大学教養教育研究・推進機構教育IRセンター長である、京都工芸繊維大学の磯崎先生に、PBLに関して京都工芸繊維大学での例を絡めてご説明頂いた。PBLは2017年度以後文科省が学習指導要領でも推進しているActive Learningに含まれるもので、複雑で変化の激しい社会に対応できるよう、教師からの受け身の教育でなく、自ら考え解決できる力を身につけてほしいということから生まれしており、PBLはその具体的な方策と言える。その特徴は、1) 協学習、2) 課題に基づく学習、3) 自発的学習、の3つが挙げられ、PBLによるメリットは、知識の定着率、思考力、応用力、表現力の向上につながるものである。三大学共同化科目では、1) 学生が自ら課題を発見し、情報を獲得するための学習の方法を計画し、仲間との討論により思考を深め、問題解決にあたる、2) 学生が能動的な学習を行う、3) 能動的学習の過程、アプローチ方法の習得状況を評価とする、の3つを満たす授業を一部の授業回に取り入れていればPBL科目となっており、現在実施されている

科目は19科目（うち11科目がリベラルアーツ・ゼミナール）となっている。担当する先生はファシリテーターを意識すべき、ということであった。

以上のようなPBLの説明を受けて元NHK記者・キャスターでありジャーナリストである榎原美樹先生に基調講演をして頂いた。三大学共同化科目では夏季集中講座（【世界はいま】）と、プレゼンテーション力に関する講義を担当されている。先生によればProblem Based Learningの方が専門性が高く、Project Based Learningはもっと広義なもので、欧米では小学生から行われているようである。榎原先生はGlobal AgendaというNHKの国際放送の討論番組のモデレータ（進行役）としての経験がとても活かされているとのことであった。つまり番組では専門家の話を聞きながら、彼らの言いたいことをうまく引き出しつつ、議論を活発化させるスキルが必要で、これはPBLにおいて、学生にできるだけ能動的に議論に参加してもらうことと非常に類似しているというわけである。

プレゼンテーション力の講義では、一方向の行為ではなく、発信者と受け手の双方向コミュニケーションであることを意識させることに努力されているとのこと、さらに大切なこととして、相手の話を聞く力を身につけるようにし、無選別にペアを組ませて、その相手（Buddy）を褒める力を身につけるよう学習させているとのことである。どこがいいのか具体的に褒めるためには、自然と相手の話していることを深く理解しようと努力するものである。このあたりの話は私にも経験があり、感銘を受けるお話しであった。そして、その取り掛かりの具体的な方法として、Buddyと互いにインタビューしあい、他の学生に自己紹介ならぬ他己紹介のプレゼンをおこなうという手

法をとり、続いて簡単なテーマに自分自身の身近な話を30秒でスピーチし、さらにそれを2分に広げると、非常に深い話になると言う事例をお話しされた。また2分あるとたいいの話は十分説明ができ、人の心を動かすことができるということを榎原先生はニュースを発信する時の経験で知っており、それを学生にも体験してもらい、ちゃんと聞いてもらえたという実感を味わってもらうという内容であった。また双方向コミュニケーションとして、フィードバックとして聞き手の意見、質問の重要性、についてもご説明された。

私も学会等で感じるのだが、座長などを担当した際には自分にあまり関連していない内容でも真剣に相手の話を聞かないとその会を回すことは難しく、質問が出ない時に自ら質問することもできない。よって質問をするという意識は、その人の話の内容の理解度が上がり、結果自分の知識が向上する（そして先生も話しておられたが、眠くならない）ことを経験しており、学生のうちからその経験を得ていくことは非常に大切だと先生のお話を聞いて改めて実感した。

続いて京都府立医科大学の杉岡良彦先生、京都市工芸繊維大学の澤田美恵子先生の報告が行われた。杉岡先生は現代医療の人間観、医学生命倫理学を担当されているなかでの講義内でのPBLの取り組み事例をお話しされた。榎原先生もお話しされていたように、医学とPBLには結構関連性が高く、患者の訴えから医師が自ら課題を発見し、情報の獲得、思考を深く巡らせて課題解決につなげるという流れは、まさにPBLと類似しているというわけである。そこで、現代医療の人間観では、最初に“人間とは何か”という非常に深遠な課題を出し、その解答を基に学生さんに議論を行ってもらい、一旦否定しつつ、関連のある講義を行っ

た後、もう一度考えてもらうという、フィードバックのとれた講義を行っているとのことであった。

次に澤田先生が京の伝統工芸について、PBLをおこなってる経験をお話しされた。この講義は京の文化遺産を守り、問題解決を考えるとということで問題解決型、課題解決型どちらも関連しており、さらに留学生も加わっているグローバルなもので、非常に密度の濃い講義のように感じられた。またPBLの難しさの一つに評価の仕方が挙げられるが、その方法についてもご自身の経験を語られ、参考になるお話しであった。

質問も活発に行われ、予定の1時間半を15分以上も超える大盛況のなか、終了した。最後になりましたが、非常に貴重なご講演を頂いた3先生に感謝を申し上げて報告としたいと思います。